

鸚鵡

——大震覚え書の一つ——

芥川龍之介

青空文庫

これは御覽の通り覚え書に過ぎない。覚え書を覚え書のまま発表するのは時間の余裕に乏しいのである。或は又その外にも氣持の余裕に乏しいのである。しかし覚え書のまま発表することに多少は意味のない訣でもない。大正十二年九月十四日記。

本所 横網町に住める一中節の師匠。名は鐘大夫。年は六十三歳。十七歳の孫娘と二人暮らしなり。

家は地震にも潰れざりしかど、忽ち近隣に出火あり。孫娘と共に両国に走る。携へしものは鸚鵡の籠のみ。鸚鵡の名は五郎。背は鼠色、腹は桃色。芸は鋳屋の槌の音と「ナアル」（成程の略）といふ言葉とを真似るだけなり。

両国より人形町へ出づる間にいつか孫娘と離れ離れになる。心配なれども探してゐる暇なし。往來の人波。荷物の山。カナリヤの籠を持ちし女を見る。待合の女将かと思はるる服装。「こちとらに似たものもあると思ひました」といふ。その位の余裕はあるものと見ゆ。

鎧橋に出づ。町の片側は火事なり。その側に面せるに顔、焼くるかと思ふほど熱か

りし由。又何か落つると思へば、電線を被へる鉛管の火熱の為に熔け落つるなり。この辺より一層人に押され、度たび鸚鵡の籠も潰れずやと思ふ。鸚鵡は始終狂ひまはりて已まず。

丸の内に**出づれば**日比谷の空に火事の煙の揚がるを見る。警視庁、帝劇などの焼け居りしならん。やつと楠の銅像のほとりに至る。芝の上に坐りしかど、孫娘のことが気にかかりてならず。大声に孫娘の名を呼びつつ、避難民の間を探しまはる。日暮。遂に松のかげに横はる。隣りは店員数人をつれたる株屋。空は火事の煙の為、どちらを見てもまつ赤なり。鸚鵡、突然「ナアル」といふ。

翌日も丸の内一帯より日比谷迄、孫娘を探しまはる。「人形町なり両国なりへ引つ返さうといふ気は出ませんでした」といふ。午ごろより饑渴を覚ゆること切なり。やむを得ず日比谷の池の水を飲む。孫娘は遂に見つかからず。夜は又丸の内の芝の上に横はる。鸚鵡の籠を枕べに置きつつ、人に盗まれはせぬかと思ふ。日比谷の池の家鴨を食らへる避難民を見ればなり。空にはなほ火事の明りを見る。

三日は孫娘を断念し、新宿の甥を尋ねんとす。桜田より半蔵門に出づるに、新宿も亦焼けたりと聞き、谷中の檀那寺を手頼らばやと思ふ。饑渴愈甚だし。「五郎を殺

すのは厭いやですが、おちたら食はうと思ひました」といふ。九段上くだんうへへ出づる途中、役所の小使らしきものにやつと玄米げんまい一合余りを貰ひ、生なまのまま噛み砕かくだきて食す。又つらつら考へれば、鸚鵡の籠を提さげたるまま、檀那寺だんなでらの世話にはなられぬやうなり。即ち鸚鵡に玄米の残りを食はせ、九段上の濠端ほりばたよりこれを放つ。薄暮はくぼ、谷中の檀那寺に至る。和尚をしやう、親切に幾日でもゐるといふ。

五日いつかの朝、僕の家きたに来る。未だ孫娘の行く方ゆへを知らずといふ。意気な平生のお師匠ししやうさんとは思はれぬほど憔悴せうすゐし居たり。

附記。新宿の甥の家は焼けざりし由。孫娘は其処そこに避難し居りし由。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鸚鵡

——大震覚え書の一つ——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>